

“失われた青春”

ソ連抑留時代を思う

新潟県 室川 弘 義

大正末期生まれの私は、昭和十九年十月に本部第三十一部隊に入隊した。入隊後わずか二週間で、北朝鮮の輸送部隊で車両中隊に編入された。

無法な初年兵教育を受けつつも、ひたすら軍務に精励していた。しかし無謀な侵略戦争は日に日に敗戦の気配濃厚な状況となりつつあった。やがて昭和二十年八月十五日、ついにポツダム宣言受諾、日本軍の降伏するところとなり、このときから運命の四か年間が始まるのである。

敗戦の際に北朝鮮の南陽市にいた師団本部は、旧満州各地に駐屯していた関東軍とともにソ連軍によりすべての武器弾薬や食糧まで押収された。わずかに残された食糧は、このあとソ連領土のシベリアに強制連行す

るために一たん、旧満州の図們市まで昼夜をわかつずに集結させるためのものであった。

図們市でまず高官将校と兵、下士官等をそれぞれ二千人くらいの大隊に編成替えをしたのである。私は一般作業要員大隊に入り、約一週間の徒步行軍の後ソ連領に連行され、それから抑留者を、シベリアの各地区に散在していたソ連国囚人の収容所を一齐に解放した上、貨車で順次目的地まで移送した。私はハバロフスクを通りさらに北東部にあるコムソモリスク地区にある収容所に収容された。

この収容所は駅から案外近いところにあり、抑留後の最初の作業は、貨車で輸送されてくるエン麦、羊肉、馬鈴薯等を荷下ろしし、量目を確認して麻袋に詰め直してトラックに積み込むのである。貨車は大型で、積み荷は、それぞれ若干の目減りを考えてか、輸送の伝票以上に積まれて来る。作業に引率して来たソ連軍兵士や監督は、その目減り分をピンはねするようと言う。

一日中同じ作業をしていると、特に疲労の感じが強

く感じられる。そうした折、一日の作業終了直前に、前述の羊肉、馬鈴薯等目減り分のピンはねのものを、監督が引率の兵に何やら耳打ちして、我々に少しずつ「内密に」といつてくれたのである。作業の仲間とともに夜食にそつと食べたことを思い浮かべ、抑留当初の作業内容が幸いして、今日まで生き長らえたのだと思う。昨今である。

抑留中に従事した作業はさまざまである。森林伐採、バム鉄道建設の砂利おろし、夏季は草刈り、馬鈴薯の植種等数え上げれば際限のないいろいろな経験した。いずれの作業もノルマ達成にはとても我々の体力ではなし遂げることはできない過酷なものであった。

このような重労働を強制し、ノルマ次第で一日分の食事の量を増減するというのだから、兵隊どまりの抑留者はどんどん栄養失調になり、加えて大陸性の極寒にいかんともしがたく、毎日死者が出た。死亡した抑留者は全裸にさせられて、埋葬予定地に設けられたテント張りの幕舎に運ばれ、同僚の掘った墓に順次埋葬されたのである。私と一緒に作業をしていた山形県

某上等兵も、翌年の春に栄養不良とチフスにかかって死亡した。

収容所に入所させられた年の暮れころに、入所者全員に俘虜用の赤十字マークの印刷された往復ハガキが配られた。私は通訳の注意に従い、文面を片仮名で書いて故国の父に差し出した。幸いソ連軍部の検閲も済み、当時の日本駐留のGHQの検印も押された最初のハガキが父のところへ届いたのは、昭和二十一年の五月ころであった。故郷の父母や兄弟、親戚の方々が私がソ連で生存していることを確認できたのは、このハガキが父に届いたときであった。仲間のうちの一人がみんなの前で話した。「これは我々の気休めに配布したもので、片仮名で書けとか言っているが、書いても故国まで届くかどうか。ソ連の検閲もあり、故郷日本も敗戦後の混乱で始末に負えない状況と聞いている、俺は出さないよ。みんなも書くだけむだよ」等と言ってせつかくのハガキをその場で破り捨てる者もあった。

やがて別の収容所に移り、最初の往復ハガキのこと

も忘れかけていたところに、返信用のハガキで故国の父から便りが届いた。文面の内容は、家族一同無事であること、東京のおばが本土空襲で家を失い私の実家に一時身を寄せていること等を知らせるとともに、私には抑留中、健康に注意し、無事に帰国するように祈っているという内容であった。私はこのハガキを手にしたとき、何回となく読み続けた。ついに万感胸に迫り周囲の仲間の前で涙しながら泣いた。

とにかく故国のみんなに、私が生きていることの証拠のハガキだ。あのとき父に差し出していなかったらどうであつたらう。故国の親族は私の生存もわからず、心配し続けていたことであろうと思うと、本当によかつたと思う。抑留中にわずか四枚しか同種のハガキをもらえなかったが、全部父あてに差し出した。しかし返信を手にしたのは一番初めに出したハガキだけであつた。

家族を失った抑留残酷記

北海道 石川 朝雄

二列横隊に並び、両手を上げソ連下士官に武装解除を受けた。体に着けていた帯剣や鉄帽、三八式歩兵銃等々一切を、ソ連兵が乗って来たトラックに積まされ、その後身体検査だ。全員男泣きに泣き、涙をぬぐつてもぬぐつても次から次へと押さえることができなかった。このとき万年筆や時計をとられた者もいたが、自分は背が低かったので後方の方にいた。やにわに時計は腹の中に隠したので、万年筆はとられたが時計だけはとられずに済んだ。

このとき驚いたことにソ連の将校（少尉）が持っていた樺太の地図だが、その明細なこと、山の火防線、道路まではつきり記入された地図を持っていたことだ。いかにスパイ行為が戦前から行われていたことか、このこと一つでわかつたほどだ。